

## 文化的価値をつくる担い手としての幼稚園 ～多様な主体による協働～

由田学園千葉幼稚園 主任 上村尚子  
園長 山崎佳世

### 【はじめに】

3年前、私たちの園では、子ども子育て支援新制度法が施行されるということをつきかき、制度の内容を見ながら、今後の自分たちの幼稚園の方向性について考え合う時間を持った。そこで、たどり着いたテーマが「持続可能な幼稚園であるために～地域に根ざした幼稚園というあり方」というものであった。

機を同じくして、発表者（上村）が、保育とは関係のない分野ではあるが『ソーシャルデザイン特別講習』を受講する機会を持った。

約3ヶ月間、ソーシャルデザイン講座を受講していく中で、先述したテーマ「持続可能な幼稚園であるために、地域に根ざした幼稚園というあり方とは？」と、講座での内容を重ねて考えるようになった。さらに、ソーシャルデザインの視点で幼稚園を考えてみると、解決を視野に入れた新しい取り組みがアイデアとして思い浮かび、その実践の取り組みを始めることとした。

### 【実践研究の方法】

(1)実践の期間：平成26年9月～現在に至る中で、取り組んだ実践とその検証を行う

### 【研究の内容】

(1)実践においては、発表者が捉えるソーシャルデザインの考え方をもとに展開していった。その上で、ここでいうソーシャルデザインの定義を、ソーシャル（社会）→「社会デザイン」という言葉から、「社会」「デザイン」の二つに分けて意味を示すことから始めた。

○「社会」とは？

・「Society」の語源①：人間交際の訳語（福沢諭吉）、人が関わり合って生活をする場／ラテン語で「仲間」を意味する socius ソキウスや「友愛」「絆」を意味する societas ソキエタス

語源②：「社会」の訳語（『東京日日新聞』福地源一郎）

・「社会とは、異なる人間たちが、限られた空間の中で共

に住み合っていくことを可能にする知恵あるいは仕掛けの総体」

・「人」と「組織・社会」の関係性

○「デザイン」とは？

・従来の発想と方法論を超え、「社会」の仕組みや人々の参画の仕方を変革し、具体的に実現していくための思考と実践

○「社会デザイン」とは？

・無から有ではなく、今あるものの組み合わせを考えたり、異質なものの多彩な組み合わせから、話して対話して、確からしい答えを導こうという行為

・関係性を活かす、編み直すワーク。外から関係性をデザインするのではないため、当事者性・内発性が重要

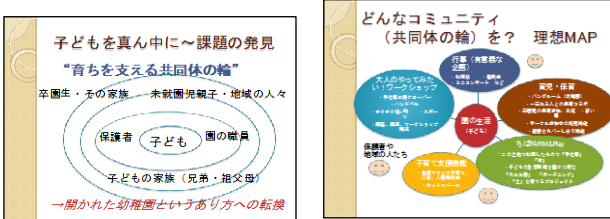
・人と社会の関係性を再構築すること

・社会の課題解決の鍵となる

(2)(1)の考え方をもとに、冒頭に挙げたテーマを照らし合わせていく。キーワードは「持続可能」「地域に根ざす」という言葉であるが、これを達成するためには、第一に現在置かれている背景を見直していく必要があると考えた。しかし、保育の根幹である「子どもを中心としながら」という願いを含めることが重要だと考え、「子どもを中心としながら課題の解決は、どのようにできるのだろうか」というテーマに焦点を絞って考えていくこととした。次に、幼稚園に関わる課題を双方向から全体的に把握していくために、ステークホルダー（利害関係者）の視点で、幼稚園との関係性を探ることにした。すると、多様な人たちの持つ力、つまりソーシャルキャピタルが最大限に生かされる土壌を作ること、それまでの課題としていた部分が解消されていき、双方の当事者に充足感が得られていくのではないかと、という仮説が生まれた。それと同時に、ソーシャルキャピタルが生かされる土壌になるためには、以下のような「開かれた幼稚園」というあり方が必要であると考えた。

・幼稚園を従来の子どもを預けるだけの施設という機能だけではなく、幼稚園の特徴とも言える、“多様な人が集う場”と捉え、集う人たちの持っている力を生かして、新たな価値を作っていくのではないかと構想。多様な人とは、幼稚園の職員、送り迎えに来る保護者、その他関わりがある人を指す。外部の人の力が加わりやすいちょっとした仕組みをつくることで、園文化に活性化をもたらすことができるのではないかと考える。

・子どもにとっての最善のことを考えるのが専門である、我々保育者が持つ視点を、どのように子どもの育ちを支えていくパートナーである家庭との間にオープンにしていけるか、言い換えると、保育の専門性を開いていくという考えを通して、子どもという存在への理解を大人が深めていける糸口になるのではないかと考える。



**【実践事例1：実現したいコミュニティに向けた試み**

**“ちばF. A. R. M&Play”を大人も体感『わいがや収穫祭』**

(1)わいがや収穫祭で大切にしていきたいこと  
子どもも大人も一緒に、自然の恵みに感謝したり、共に生活をしながら労働の汗をかいたり、収穫物を味わって喜び合ったりする仲間にありがとうの気持ちを持とう

(2)展開の方法：“参画”という新たな枠組みを取り入れて

まず前提条件として、自らも積極的に関わりながら楽しみたい人や役割があれば携わりたいと考える人、見て楽しむだけで十分という人など、大人の参加の仕方は人それぞれであるということが大切だと考えた。その上で、当事者の主体性を発揮できるようにするために、関心のある大人たちに呼びかけて、企画の段階から共に行っていく、そこで生まれた「やってみよう」をワークショップ（＝場作り）という形で、収穫祭当日まで展開していった。なぜならば、当事者である子ども・職員・保護者、それぞれの視点からの文脈作りがなされていくことによって、各々の中に主体性や当事者意識が強まると考えたからである。ただし、機会と場を提供するだけではなく、当事者の主体性が発揮されるまでの見守り役となりながら、互いの知恵を持ち寄っていくうちに“つながり”が生まれることを意識して、職員がファシリテーターの役目を果たしていった。

（＝多様な主体による協働の場面）

**(3)結果**

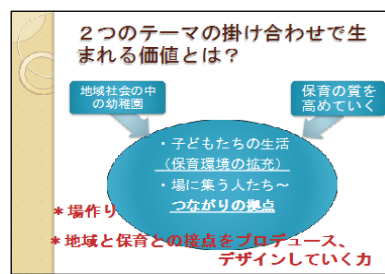
子ども：小学生や大人など多様な人たちが夢中になって取り組む様子が刺激となり、親しみや憧れの気持ちと共に、関心を持って自分から環境に関わろうとする姿が見られた。

大人：実際に自らの手を動かすことで夢中になって取り組む楽しさ、困難を乗り越えていくことなど、遊びの原点や学びの側面を実感する機会となり、同時に子どもへの理解を深めるきっかけとなったようだ。一方で、共働き家庭で時間を作ることが難しいなど、家庭の状況の差が浮き彫りになった。また、新たな枠組みで進めていくことについては、すべての家庭からの理解を得られたわけではなかった。今後はそれらの実態を考慮し、わかり合うために賛同の輪を広げていく工夫が必要であると考える。

**【まとめ】**

場作りが生まれる仕掛けや、園生活に保護者を巻き込んでいく取り組みを通して、わくわくする気持ち、つまり遊びの原点を確かめながら、子どもの良き理解者という共同体の輪を広げていき、幼稚園と保護者や地域の人との関係性に、保育の質を高めていくパートナーという意味を持たせていけたらと考える。

子どもを中心として「開かれた幼稚園」になることは、保育の質の向上、保育環境の拡充、小学生保育ボランティアなど多世代の交流、育児の不安を解消できる場や人間関係の創出など、人とのつながりを有機的に生み出しているといえるのではないかと。



そして、幼稚園が多様な人・物・知恵の集積地となることは、新しい文化が育まれるきっかけとなっているのではないかと考える。一方で、つながりの拠点作りが促されること（場作りが生まれる仕掛け）も、価値を創造するために必要なことではないか。このように考えた時に、幼稚園が、「保育のデザイン」と「場作り」の両輪で実践を重ねながら、文化的価値をつくる担い手として、地域と保育との接点をプロデュースしていけるように、今後も工夫を重ねていきたい。

